

11月3日(火)

大ロンドン市

★ トインビー・ホール



トインビー・ホールの中庭にて

世界最初の**セツルメント運動**による福祉施設といわれている『トインビー・ホール』を訪問し、施設職員で広報も担当しておられるベバリー・ラッセルさん、リンダさんから、『トインビー・ホール』の歴史や『トインビー・ホール』があるタワー・ハムレット地区の状況、同施設の取り組みなどについて、説明を受けました。その概要は、次のとおりです。

セツルメント運動とは

大学生が貧しい人たちの多い地区に住み込んで、生活の改善を図るため、ボランティアで住民の教育や相談、環境整備などに取組む社会活動。19世紀、オックスフォード大学、ケンブリッジ大学の学生が最初に始めたとされている。

- 対応者
 - ・ ベバリー・ラッセルさん
 - ・ リンダさん

○ トインビー・ホールの歴史

トインビー・ホールは、貧困問題を労働者教育と環境整備によって解決しようというセツルメント運動の一環として設立された施設である。この施設を構想したイギリスの経済学者アーノルド・トインビーの遺志を継いだ牧師

サミュエル・バーネットとその妻ヘンリエッタにより 1884年にロンドンの金融の中心地シティの東側に広がるタワー・ハムレッツという自治区に設立された福祉施設である。産業革命は街や都市に大きな成長をもたらしたが、同時に社会問題の拡大も招いた。ロンドンのイーストエンドで暮らす人々に奉仕するために、オックスフォード大学やケンブリッジ大学の学生や卒業生が住み込んで地域に溶け込み活動に参画するというモデルをバーネット牧師が考え出した。バーネット夫妻は、ロンドンで最も貧困な地域を敢えて選んでトインビー・ホールを設立した。将来、行政や政治の道に進みリーダーとなるであろう学生や知識人が最も貧困な地域で労働者などと共に生活する体験を通して、彼らが社会をより良い方向へ引っ張って行くことを目指した。

ここでは、「ゆりかごから墓場まで」の福祉政策のスローガンを掲げて労働党からの2人目の首相となったクレメント・アトリーや「社会保険と関連サービス(いわゆるヴェバリッジ報告)」を発表したウイリアム・ヴェバリッジも生活していた。また、トインビー・ホールのダイニングルームでは、これまでにウラジーミル・レーニンやピエール・ド・クーベルタンといった政治を動かした人物もスピーチを行っている。



シンボルマークは、^{いちじく}無花果の木であるが、これは^{いちじく}無花果が「命の樹」といわれることに由来する。

○ トインビー・ホールの周辺の状況

タワー・ハムレッツ自治区は、テムズ河畔にあるため、次第に貿易の中心となった。ロンドン西部が上流階級の居住地であったのに対して、東部は貿易、産業、商業の中心地となった。19世紀になると巨大な倉庫とドックが建設された。このような産業の隆盛にもかかわらず、1880年代ロンドン東部の人口の約3分の1は生活最低ラインを下回る厳しい生活を強いられていた。

この地域は、貧困と同時に人種差別の場所でもあった。1888年「切り裂きジャック(ジャック・ザ・リッパー)」連続殺人事件が起こり、「この殺人事件は、イギリス風の犯罪とは異なったもの。」といったことがいわれるなどのこの地域に対する偏見は本事件にもあらわれていた。

第2次世界大戦中、ドックは爆撃目標とされ、多くのドックや関連施設が

破壊された。戦後、急速な復興を遂げ、1960年代までは港として栄えたが、船舶の大型化により河川港であるロンドン港は優位性を失い、ドックや関連製造業も閉鎖、移転を余儀なくされ、この地域が急速に荒廃し、著しく人口が減少し、きわめて失業率の高い地域となった。この解決策として再開発が着手されたが、進出企業は社員と共に移転してきたため、新たな雇用には結びつかず地域の失業率の低下にはあまり貢献しなかったといわれている。

この地域はユダヤ人とアイルランドの移民が多い状況であるが、近年は、バングラデシュからの移民が多数を占めており、経済的には厳しい状況に置かれたひとたちが多く住んでいる。トインビー・ホール周辺の状態を見ると住民の約70%がバングラデシュなどからの移民となっている。移民の人々は、グループで力を貸し合い助け合うため、固まって生活する傾向がある。トインビー・ホールの事業の対象はこれらの人々が多くなって来ている。



様々な著名人がスピーチを行ったダイニングルーム



ラッセルさんからバーネット夫妻
について説明を受ける

○ トインビー・ホールの取組みの実例

・法律相談

「貧しい人たちの弁護士」として 1898 年に法律相談センターを開設。おそらく世界初の無料法律相談である。

貧困などにより法的な支援を受けられない人に対して、法律のほとんど全ての領域で相談に応じている。

毎年 70 人の法律の専門家と法科の学生が活動しており、毎日、法的なアドバイスを実施している。

・デイケアサービス

高層住宅、団地などでの独り暮らしの高齢者が多く、社会的な孤立、隔離状態にならないよう交流を図るためデイケアサービスに取り組んでいる。毎日、朝食、昼食を用意して、小型バスで送迎を行っている。宿泊可能な 24 ユニットの施設も完備している。本人の負担額は £1.3 (約 180 円) である。また、年金受給の相談も行っている。【£1=140 円換算、以下同様】

・高齢者虐待防止

高齢者虐待は、年齢、性別、文化的・民族的背景に関係なく何処でも、誰にでも起こり得るものである。信頼関係のある間柄でも起こり得るものである。

高齢者の威厳を守るプロジェクト：高齢者に虐待を受けていることに気づいてもらうこと、どういったことが虐待になるのか理解してもらうことが重要である。高齢者の権利と責任、高齢者虐待とは何か、虐待防止についてなど、理解を深めることができる少人数グループでの研修を実施している。虐待を受けている高齢者の駆け込み寺のような機能の部屋が 20 室ある。運営費の 3 分の 1 は地方自治体からの補助、残りは寄付金を充当。

・アスパイヤー (Aspire)

タワー・ハムレッツの子どもは、社交性のない子どもが多い。これらの子どもを対象に「アスパイヤー」というプロジェクトを実施。イースト・ロンドンに住む 9 年生 (13~14 歳) を対象に 3 つの研修・体験に分けてテーマを設定し実施している。市民権について考える研修、創造性を表現する研修、冒険心に満ちた野外活動体験。とりわけ野外活動としては、75 フィートのヨットでセイリングを行い、少年少女に水平線を見せ、水平線の向こうにやりたいことがある、可能性には限りがないということを実感させ、個人として生きていくことの大切さを学ばせたいという意図をもって実施し成果をあげている。

・売春婦へのサポート

トインビー・ホールのあるこの界隈は、先にも触れた 19 世紀末に「切り裂きジャック(ジャック・ザ・リッパー)」という連続殺人事件で最初に売春婦が殺害されたところで、今なお、売春が続いている。売春婦は覚せい剤の使用も多く、なかなか抜けられない現状がある。本施設の専門員が売春婦のところへ出向いて相談に応じたり、教育を行っている。ロンドンオリンピックの工事関係の労働者を狙って、売春婦が増えている実情がある。医学面健康面については、別の団体がサポートしている。一つの団体で全ての分野のサポートすることは不可能である。

○ 職員の状況

トインビー・ホールの現在の職員体制は、常勤の職員は 65 名。他にボランティアが年間 400 名以上活動している。

* 『トインビー・ホール』を視察して

イギリスの福祉政策は、「ゆりかごから墓場まで」ということばで象徴されていますが、第一線の現場では、非常に多岐にわたる事業が市民によって支えられ、脈々とその伝統が引き継がれてきた歴史の重みをひしひしと感じました。

大阪においても、ヨーロッパの救貧委員制度を参考にいち早く方面委員制度が導入され、また、民間人の手によって各種の施設が設立、運営されるなど福祉を市民がリードしてきた歴史がありますが、これからの福祉の推進にあたっては市民協働は、不可欠であると確信した次第です。

11月4日(水)

大ロンドン市

★ ロンドンの再開発

* (財)自治体国際化協会ロンドン事務所

大阪市においても長年にわたり、私の住んでいる港区をはじめ、ウォーターフロントの開発をしてきた経過がありますが、ロンドンにおいても非常に長い開発の歴史があり、盛衰を繰り返しながら今日に至っています。本市の今後の港湾をはじめとするウォーターフロントの開発のあり方の参考とするため、ドックランズなどのテムズ川流域の開発がどのように進められたのか、また、現状はどうなっているのか、視察、調査しました。(財)自治体国際化協会ロンドン事務所を訪れ、藤島所長、山口次長にお会いした後、イルメン・キルヒナー主任調査員からドックランズのこれまでの経過や成果、現状などについて伺いました。説明を受けた内容、調査の概略は次のとおりです。

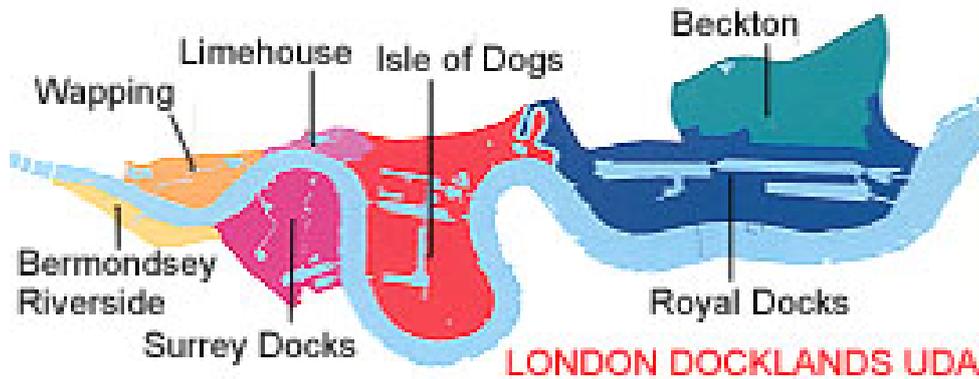
○ 対応者

- ・ 藤島所長
- ・ 山口次長
- ・ イルメン・キルヒナー主任調査員



イルメン・キルヒナー主任調査員からドックランズ等の説明を受ける

○ ドックランズ



ドックランズはロンドンの都心から東へ約8kmに位置するテムズ川流域のサザーク自治区、タワー・ハムレット自治区、ニューハム自治区の三区にかけて再開発されている約2,200haの地域の名称である。歴史的には世界最大の貿易港として栄えたこともあったが、コンテナの登場による海上輸送の変化や都市型工業の衰退、公共交通機関の整備の遅れなどで衰退し、1970年頃にはすっかり荒廃した地域となった。そこで、1971年環境省とGLC(GLCについてはp41で詳述)がコンサルタント会社に開発計画の作成を委託し、1973年、ホテル、ショッピングセンター、マリナーなどを建設しようという計画案が発表されたが、労働党が主体であった地元自治体は、地域のニーズを優先した計画であるべきとして反対した。

環境省は翌1974年、この計画案を廃止し、GLC、地元自治体、ロンドン港湾庁、労働組合会議によって構成されるドックランド合同委員会を設置した。1976年、同委員会は「ロンドンドックランド戦略計画」を発表した。この計画は主として低所得者用住宅を建設し人口を倍増させようというものであった。1974年労働党が与党となっていたこともあり、この計画は実行に移されたが、1976年財政危機により、公共投資が抑制され計画は行き詰まった。

1979年サッチャー政権が誕生し、政治的にも計画の遂行は困難となった。サッチャー政権は再開発の権限を従来の自治体から中央政府が中心となるよう法改正を行い、都市開発公社を設置し権限を与えることができるようにした。

この土地開発公社は、国から直接の補助金を受け、強制収用権に裏打ちされた土地の購入を行うことができ、都市基盤の整備を実施することができた。この土地開発公社は、PFIの先駆けとなった。

そして、ドックランド地区での失業率の増大、人口流失、遊休地問題解決の切り札として、1981年ロンドン・ドックランズ開発公社(LDDC)を設立した。LDDCと並びもう一つ重要な政策として、「エンタープライズゾーン」の設定がある。企業誘致を進めるため、指定地域においては、規制緩和撤廃や税制上の優遇措置を行うものである。ドッグズ島もこの指定を受けた。これらの政策

により、大企業の誘致など大規模開発が進展し、金融都市カナリー・ワーフも誕生した。しかし一方で、LDDC も思ったようにテナントを集めることもできず、また、低所得者の住宅ニーズには十分応えきれないという状況もあった。LDDC による事業は 1998 年 3 月末に終了した。

LDDC の 17 年間の主な業績

- ・ 公共部門の投資：£ 18.6 億(約 2,600 億円)
- ・ 民間部門の投資：£ 77 億(約 1 兆 1,000 億円)
- ・ 再開発で売却された用地：1,066 エーカー
- ・ 道路の新設：144 km
- ・ ドックランドライトレールウェイの敷設
- ・ 商業、産業用のフローア建設：2,500 平方フィート
- ・ 未利用地の開発：1,884 エーカー
- ・ 住戸の供給：24,046 戸
- ・ 2,700 の取引企業
- ・ 5 つの新保健施設と 6 つ以上の再開発への貢献
- ・ 小学校 11 校、中学校 2 校、大学 16 校、職業訓練校 9 校への資金提供
- ・ 建築、自然保護、造園に対する 94 の賞
- ・ ドックランズにおける 85,000 人の雇用

LDDC の解散に伴い都市計画の権限はサザーク区、タワー・ハムレット区、ニューハム区に戻された。LDDC の資産については、「イングリッシュ・パートナーシップ」に継承された。

1997 年、労働党のブレア政権が誕生し、ブレア政権は自由主義でも社会主義でもないコミュニティを重視し、小さな政府を目指す「第三の道」という路線を打ち出した。

こうした中、2005 年にロンドン・テムズ・ゲートウェイ開発公社(LTGDC)が設置された。LTGDC には地域再生のため、土地・建物の有効利用、魅力的な環境づくり、経済成長を促進、地域に居住し働くことを促すための住宅や施設の活用に関する権限が持たされた。現在、LTGDC により、ドックランズより更に東方に向けた再開発が進められている。また、2012 年開催のロンドンオリンピックのメインスタジアムなどの関連施設は、ロンドン東部地域において整備が進められているが、中央政府及び GLA は、この再開発が同地域の活性化など LDDC の開発で残された課題解決に繋がるものと思いを持っている。

○ オリンピック公園

ロンドンオリンピックはロンドン東地区の 2.5 km²再開発の促進の意義もある。

産業汚染された土地はこの 3 年間で急激に再生された。オリンピック公園は、オリンピックのための緑地であり、オリンピック終了後は、この周辺の住民と野生生物のための緑地となる。公園の南部では、川辺の公園、マーケット、イベント、カフェやバーなどでお祭り気分を盛り上げ、公園の北部地域では、カワセミをはじめカワウソまで既存のめずらしい種類の生き物の生息地となるよう洪水や雨水を管理する最新の緑化技術を駆使している。

将来、来訪者に楽しまれ、野生生物の棲みかとなる緑地公園を形どる英国産の樹木がおおよそ 2,000 本厳選された。トネリコ、ハンノキ、樺、ハシバミ、サクランボ、ポプラ、ロンドンプラタナス、ライムなどいずれも英国の品種である。

30 万本以上の湿地植物も公園に植え付けられることになっている。これらは英国過去最大の都市の河川、湿地への植林である。これらは、オリンピックに向けた多彩な川辺整備に一役買っている。水生動物センターとオリンピックスタジアム間の 0.5 マイルは植物や庭園に対する英国の情熱の世紀を賛美する公園地帯である。また、非常にアクセスのよい公園となっている。公園への経路の勾配は誰にとってもアクセスし易く、新会場と周辺のランドマークの眺望も維持されている。ヘンマンヒルズでは、オリンピック開催中に訪れた人たちが大きなスクリーンで生中継を観ることができるようになる。



説明を伺った後、オリンピック公園を視察しました

* オリンピックスタジアム

2012年ロンドンオリンピックのメイン会場となるスタジアムの建設現場の視察も行いました。通常、部外者は、なかなか現場エリアに入れてもらえないとのことでしたが、特別にお願いしてスタジアム建設現場を視察させていただきました。



建設現場の担当者の方と

奥がメインスタジアムです



80,000人の収容が可能となる
メインスタジアム

オリンピック、パラリンピック開催中は 80,000 人を収容する競技の主会場であり、開会式、閉会式も開催される。スタジアムの建設は 2008 年 5 月に始まった。

会場の基礎となる 4,000 本のコンクリートパイプは 2008 年 10 月に打ち込みが完了した。建設作業は、スタジアム下段の 25,000 の固定席を支えるコンクリート柱の設置から始まった。その後、取り外し可能な 55,000 の座席を支える仮設の鋼材の構築物とコンクリートのテラスを段々に積み上げている。

座席本体の据え付けは 2010 年から始まる。スタジアムの屋根の工事は、2009 年 1 月から始まり、28 本の白い支柱は全て設置された。ケーブルネット製の白い屋根はできあがっており、2010 年の早い時期に吊上げられる予定である。



**プール等の建設工事も
着々と進んでいました**

**プールの屋根は独特のカーブを
描いています**

